

# 愉快なば〜てい〜

餅屑

登場人物

牧田利樹

新妻黄太

長谷川陸

多田雄二

村岡駿

室井紗耶香

牧田の住んでいる部屋のリビング

舞台の下手寄りにカーペットが敷かれていて、その上に長方形のクリアテーブルがあり、それを取り囲むようにソファが設置されている。

ソファは一人掛け用が二つと、三人ほど座れる長めのものが一つ用意されていて、クリアテーブルの縦横に合わせて置かれている。

ソファの後ろ辺りにはクローゼット。

上手寄りに引き出しの三つついた小さめの棚がある。

中央には血まみれになって横たわる長谷川と二本の包丁があり、その傍で血飛沫を浴びた牧田と新妻が途方に暮れている。

新妻「いやあ……やっちゃったなあ……」

牧田「やっちゃったよ……やっちゃったよ、ホントに……どうすんだよコレ……」

新妻「どうするつつたつて……もう脈も止まってるっばいしなア。完全にお陀仏だろ」

牧田「そうだよなあ。どうしようもないよなあ」

新妻「しかし、人の命つてのは儂いものだねえ。これが……諸行無常の響きありつて、やつなんだろうなあ……」

牧田「なんか……なんでそんな余裕あんのお前」

新妻「え？」

牧田「人殺しちまったんだぞ、人お！ 分かってんのかこの状況!？」

新妻「分かってるよ。でも焦ったつてしょうがないだろ。もう手遅れなんだし」

牧田「ああ、くそお。なんでこんなことに……もし魔法が使えたらなあ。今すぐに時間戻してこんななかったことにできるのに」

新妻「(半笑いで) いやいや、魔法なんて使えるわけないじゃん」

牧田「(食い気味で) 知ってるよ、バカ!」

少しの間。

新妻「でもまあアレだよ。人一人殺したぐらいじゃさ、どうせ懲役何年かで済むんだし。そんな気い落とすよなあ? (牧田の肩にポンと手を乗せる)」

牧田「……は? (顔を上げて)」

新妻「ん?」

牧田「いや、待って……待てよお前。なんで俺が殺つたみたいになつてんの?」

新妻「(とぼけたような表情で) え……だつてそうじゃん。殺したのお前じゃん」

牧田「(激昂して) ハアアアアアアアア!?!? ふざけんなよ、お前! どう考えたつてお前が悪いじゃん!」

完全になんかのせいじゃん! そして! 俺は何も悪くない! 一ミリも悪くない!」

新妻「え、なに言つてんの? だつて刺したのお前だろ?」

牧田「いや、そうだけども、刺すように、こう、誘導したのはお前じゃん。お前がなんもしなけりゃ、長谷川が死ぬことはなかったじゃねえかよお！」

新妻「(呆れたように) あゝはいはい、分かった分かった。うん、お前の気持ちは分かるぞ牧田。たしかにな、自分でやつとことを信じらんないってのは分かるけども。けんどくも。でも、殺したのはどう考えたってお前だぞ牧田。俺に責任をなすりつけるってのは、さすがに酷いんじゃないか？」

牧田「お前……お前マジでふざけんなよ！ じゃあいいよ、今からお前が完全に悪いってことをバカなお前でも分かるように説明してやつから一字一句逃さずに聞けよコラア！」

新妻「ああ……別にいいけど」  
牧田「(小言を漏らすように) マジなんだコイツ……はい、じゃあまず最初ね。この、長谷川殺人事件の最初、事の発端がお前だったのは認めるよな？」

新妻「……そうだったけ？」  
牧田「そうだよバカ！ お前が長谷川の買って来た(テール)の上の袋からワサビ味の柿ピーを取り出して、このワサビ味の柿ピーに文句付けたのが始まりだろ！」

新妻「(少し思案して) ああそうだそうだ！ そうだよ、長谷川がさ。俺の大っ嫌いなワサビ味の柿ピー買ってきやがったんだよ。ほら、俺さ、刺激の強い系の食べ物基本ダメじゃん？ そのことアイツも知ってるはずなのにさ、なんでワサビ味の柿ピー買ってくんのかねえ、ホント気が利かないよなあ〜」

牧田「そうだよな？ で、お前が長谷川にプチ切れたんだよな？」

新妻「ああそうだよ。この前長谷川とちよつと喧嘩した

こともあってさ、なんかプチンって堪忍袋の緒が切れてさ、『てめえなんでワサビ味の柿ピー買ってくんだけバカヤロウ！』つつつてバア〜ンつてぶん殴った」

牧田「それで、そんな時は台所で料理してたんだよ。んで、『うわあ〜アイツぶん殴っちゃったよ』つてちよつと心配そうに眺めてたわけ。そしたらさ、意外にも長谷川が殴り返してきたんだよな」

新妻「そうそう。アイツ基本意地なしで弱虫だからさ。俺もちよつとビックリしてさ。え？ お前そういうキョラじゃなくね？ つて。んでそれと同時になんで俺がコイツに殴られなきゃなんねえんだって火い点いちゃつて。もう一発ガチでぶん殴ったんだよ」

牧田「で、この辺りで俺は『ああこのままでとマジイな。止めなきゃ』つて思つて包丁持ったままリビングの方行つたんだよ。したら長谷川がまた殴り返して……」

新妻「そう。それで、俺もう完全にキレて。頭ん中真っ赤になつてさ。コイツだけは絶対に許さねえつて思つて、牧田が長谷川の後ろにいんのにも気づかずじまたぶん殴つちまつたんだよな」

牧田「そうよ。で、長谷川が急に俺の方によろけてきたからさ。危ねえ！ つて思つて、こう(血まみれの二本の包丁を手にとつて)突き出しちゃつたんだよ、包丁を。そしたらもうグッサ〜ンつて刺さつちやつて血がブツシュオワアアアア〜ンつて」

新妻「な。でも俺はもう腹に包丁刺さつてんのにも気づかずパンツパン殴つてた」

牧田「俺は『やばい、どうにかして包丁抜かなきゃ』つて思つて引き抜くじゃん、包丁。したらお前が殴つた衝撃で長谷川がまたこつちの方にきて今度は別るところにグッサ〜ンつて刺さつてまた血がジュバアアア〜ンつ

て出てさ。もうその繰り返しよ。俺が引き抜いて、お前が殴つて、また刺さつて血が出て。俺が引き抜いて、お前が殴つて、また刺さつて血が出て……結果この有り様だよ！ 地獄絵図だよオオオオ〜ンつて！」

新妻「(ホントに可哀想になア長谷川。ちゃんと成仏してくれよ、ナンマンダブナンマンダブ……)」  
牧田「だからなんで余裕あんたお前！ てかこれで分かっただろ？ この事件で一番悪いのは俺じゃなくてお前だつて」

新妻「いや、でも結局お前じゃん。最終的な殺しの原因になつたのはお前じゃん」  
牧田「……は？」

新妻「だから、お前が包丁持つてリビングに来なければよかつたんだよ。そうすりゃこんなことにはならなかつたんだ。それにさ、警察に捕まって罪を科せられんのは絶対お前だぜ？ 遺体には大量の刺突跡。そして、凶器らしき包丁にはお前の指紋がベツトリ。もう完全にお前が黒じゃん」

牧田「(泣きそうになりながら) なんで……なんでそうなるんだよオオオオ〜ンつて！ 俺はさ、ただ料理をしてたんだよ。なんでお前らの喧嘩止めなきゃつて、咄嗟に包丁持つたままリビング行つたつてだけなのに……なんで……なんでだよお……！」

新妻「てか、なんで包丁二本持つてたんだよ。二本使う必要なくね？」

牧田「(泣きながら) キャベツの千切りをしてたんだよお！ こうやって(二本の包丁を床に打ち付ける) トントん、トントんつて、美味しくな〜れ、美味しくな〜れつて、キャベツを千切つてたんだよ。二本の方が早いからあ、二本使つて……皆のために、頑張つて料理

してたのに……ヒック、なんで、なんでこんなことに……」  
新妻「わ、分かったよ。そんな泣くなよなあ。俺も言い過ぎたって」

牧田「うん……うん……」

新妻「今は言い争うよりもな、今後のことを考えなくちゃ。どうすんだ？ そろそろ、みんな来る頃じゃないのか？」

牧田「(ハツとして顔を上げる) そうだ。そうだよ。動転して忘れてた。今日、長谷川の留学行つてらっしゃいパーティーじゃねえか！ どうすんだよ！ 主役死んじまったじゃねーか！」

新妻「なあ。このままだと天国行つてらっしゃいパーティーになっちまうなあ」

牧田「(新妻の頭を叩いて) 笑えねえこと言つてんじゃねーよ。ヤバイよ、このままだとみんな来ちゃうよ。しかも、さつきグループラインで『新妻と長谷川はもう来てま〜す。三人とも急いでね〜』って、三人で仲良しそうにピースしてる写真送つちやつたから、向こうも絶対急いでるし。もう最悪だよ！」

新妻「落ち着け牧田。とりあえず三人が来る前にどうにかしよう。まずはできることからやろうぜ。とりあえず、凶器をどこかに隠して……あとは俺たちの服装もどうにかしないと。メッチャ血まみれだし」

牧田「お、おお、そうだな。なんだかお前が急に頼もしくなってきたぜ」

新妻「だろ？ まずは包丁だな。この二本の血まみれ包丁をどうするか」

牧田「普通に台所に仕舞つとくと、室井が料理しようとした時に見つけちゃうかもしれないし……よし、とりあ

えずあの戸棚に仕舞つとこう。誰かが戸棚に近づいても止めればいいし」

新妻「そうだな。そうしよう」

二人は戸棚に赴いて一番上の引き出しに包丁を仕舞う。

新妻「これでよし。次は服だな。着替えてどこあんの？」

牧田「クローゼットの中。あ、そうだ。俺、血拭くタオル用意してくつから。テキトーに先着替えという」

新妻「オッケー」

急いで下手にはける牧田。

その間に新妻は服の上下を脱いで、クローゼットの中にあつたワイシャツとスーツの上下を着る。

その後、濡れタオルを持った牧田が帰ってくる。

牧田「おまたせ〜、タオル用意した……(スーツ姿の新妻を見て呆れた顔をする) なんで……なんでスーツ着てんのお前……」

新妻「(とぼけた表情で) え……だつてテキトーに着替えてって」

牧田「だからってなんでスーツなんだよ！ 普通のジーンズとかティーシャツとかあつただろうが、中に！ お前がフォーマルな格好してたらみんなオカシイって思うだろ！」

新妻「ああ、そつか。ゴメン」

牧田「(しかもこれ……(焦つて新妻の着ているスーツをチェックする) もお〜〜！ 血い付いちゃつたじゃない！ これ新しく新調したスーツだったのにい！」

新妻「いやそれは知らないよ。着替えててつて言ったのはそつちじゃん」

牧田「そうだけどさあ……もういいから、一旦脱いで。そんでタオルで血拭きとつてから普通の服に着替えるぞ」

新妻「(ぶつくさと) わつがまだまだなくホントに。そつちが着替えるつて言つたくせに」

牧田「んだと！ 元はと言えお前が悪い……！」

新妻「(牧田を諷めるように) あ〜分かつた分かつた。今は言い争つてる場合じゃないから。な？ 分かるだろ？」

牧田「(不服そうに) ったく……」

二人は急いで服を脱いでパンツ一丁になり、濡れタオルで全身を拭つて血を落とした後、クローゼットの中のシャツとズボンを着る。

牧田「よし、これで服装も大丈夫だな」

新妻「血まみれの服の方はどうする？」

牧田「あ〜そうだな〜(少し思案して) そうだ。戸棚の三番目の引き出しに大きめのゴミ袋あつから、そん中に詰めてクローゼットの中に仕舞つとこう」

新妻「よし」

戸棚に駆け寄つて三番目の戸棚からゴミ袋を取り出す新妻

その間に牧田は二人の脱いだ服を丁寧に畳んでまとめている。

新妻「(焦つたように) おい、大変だ！」

牧田「なんだよ。この状況以上に大変なことってそうそうないぞ」

新妻「袋が……袋が二枚しかないぞ！」

牧田「訝しげに」はあ？ それの何が大変なんだよ」

新妻「お前いいのか？ この貴重な二枚の内一枚使っちゃって。もしこれで服入れるのに一枚使っちゃってさ、もう一枚の方にこう、ゲロゲロゲロ〜って誰かが吐いたとするじゃん？ したらさ、もう次からゲロ吐く袋なくなっちゃうじゃん。誰かがまた吐きそうになっても袋ないから、床に吐くしなくて……もう大惨事になるぜ！？」

少しの間。

牧田「お前が何言っつつか全然分かんねーよ！ てか大惨事にはもうなってるよ、バカ！」

新妻「ええ、でもさ。やだぜ俺、ゲロ塗れになった部屋でパーティすんの。くっせえしよお〜」

牧田「フチ切れながら」誰かがゲロ吐くとは限んねえしゲロ吐く袋なんて他にもいくらでもあんだよ！ いいから持ってこいやコラアツ！ オオンツ！」

新妻「そんな怒んなくても……分かったよ」

新妻は大きなゴミ袋を二枚とも持つてくる。そして、片方を牧田に渡して、もう片方をテーブルの上に乗せておく。

牧田はゴミ袋を広げて中に畳んだ服を入れ、クローゼットの中に仕舞う。

牧田「よし……これでオッケーだな」

新妻「あとは……」

長谷川の死体を眺める二人。

新妻「これをどうするか、だな」

牧田「どうするも、こうするもねーよ。どっかに隠さないと……てかもう時間がない！ 早く処理しまわねーと」

新妻「そうだな、クローゼットの中に詰めんのも無理あるし。どっかに運んでる暇はないし……」

牧田「なんかいい手はないのかよ！」

新妻「何か閃いたような感じで」いや待てよ。そうか、思いついたぞ」

牧田「ほ、本当か！？」

新妻「牧田……今年は何年だ？」

牧田「(困惑しながら) え……二〇一五年だけど……」

新妻「そう今年は二〇一五年だ。バック・トゥ・ザ・フューチャーでマティーがタイムトラベルした未来と同じ年だ。二〇一五年、いや紀元前を含めればもつと長い間、俺たち人類は種族の繁栄に努めてきたわけだ」

牧田「なんだよ、なにが言いたいんだよ」

新妻「つまりだな。こんだけ長いことやってきたんだから、人の生き返らせる方法の一つや二つはあるかもしれない！ いや、あるに違いないってことだよ！」

少しの間。

牧田「あるわけねえーだろバカヤロウ！ もう少し現実的なこと言えよなんだよそれ！」

新妻「いたって現実的だつて。遺体なんてなかなか隠し

ようがないし。だったら生き返らせちゃうのが手っ取り早いだろ？」

牧田「だから無理だつて言ってるだろ！ そんな方法どこにあんだよ！」

新妻「今からネットで見つけんだよ。待ってる。いい方法拾ってきてやつから」

スマートフォンで検索し始める新妻。

牧田は深くため息を吐いて苛立たしげにその場をうろつき回る。

新妻「おつ、あった。喜べよ牧田ア！ 死者を蘇らせる方法見つけたぜ！」

牧田「あつそ。で、どんなやつ？」

新妻「なんか、あ、あぶ……アブラメリンの魔術つてやつらしい」

牧田「もうその時点で信用ならないけどな」

新妻「え〜と……まずはアブラメリンの護符を作るために、半年間人里離れた荒野や山奥に籠って修行しなう」

牧田「ほら、もうダメじゃん。半年なんて誂外だぞ」

新妻「いやでもさ。俺らつてさ、この辛くて暗い人生という長い道のりをさ、どうにかこうにか二十年くらいやってきたわけじゃん？ それつて要するに、長い修業を耐えてきたとも言えなくはないっしょ？ だからまあ……大丈夫だろ」

牧田「結果人殺してるわけだけだなあ……まあとりあえずそういうことにして、だ。具体的にどうすんだ？」

新妻「え〜と……アルファベットの書かれた四種類の護符を人が死ぬ瞬間を見計らって東西南北の四方位に向け

て置き、四人の超強力悪魔を召喚する……だつてさ」

牧田「なんだ超強力悪魔って……てか死ぬ瞬間だともうダメじゃん！ とつくのとうに死んじやつてるじゃん！」

新妻「でも超強力悪魔ってんだから、死んだ瞬間じゃなくともその辺は寛容になんとかしてくれんじやね？」

牧田「いや知らんけども……あとアルファベットの書かれた護符ってなによ。なに書くのさ」

新妻「それは俺に任せとけて。なあ、俺のバックからノートとペン取ってくれ」

牧田「別にいいけど……」

新妻のバックからノートとペンを取り出し、それを新妻に渡す牧田。

新妻「よし、これを破って四枚に分けて……」

牧田「焦りながら」おい、なんでもいいけどよお。早くしてくれよ。もうみんな来ちまうぞお！」

新妻「分かっているって。そんな急かすなよ」

牧田「もお……」

新妻「え〜と、東西南北に置くんだから、それに因んだアルファベットの方がいいよな。だから……え〜と、北のKだろ、で西のN……」

牧田「なあ……」

新妻「なに？」

牧田「わっかんないけどさあ……それでいいの？」

新妻「なにが？」

牧田「北だからKとか、さすがに馬鹿にし過ぎじゃん？  
せめて、北だったらノースのNとかにしといた方がいいんじゃない……」

新妻「別にいいだろ！ お前こは日本なんだぞ。だつたら北のKでいいだろ」

牧田「まあいいけどさあ」

新妻「……よしできた！ 牧田、この方角分かる？」

牧田「え〜と（下手を指さして）あっちが北だな」

新妻「よし」

東西南北に合わせて長谷川の周りに護符を並べる新妻。

新妻「ヨッシャ、これで完成だ。ふっふう〜、これで

長谷川が蘇るぞオイ」

牧田「……で？」

新妻「ん？」

牧田「こつからどうすんだよ。悪魔なんか全然出てこないぞ」

新妻「そりやそうだろ。出てきてくたさ〜いって頼まないと、悪魔だつて出てきづらいだろ」

牧田「どう頼むんだよ」

新妻「その辺りはノリでどうにかなるって。まあ任せろよ」

牧田「なんだよノリって……」

舞台の中央、長谷川の遺体の傍で気合を溜める新妻。その横で牧田は怪訝そうにその様子を見つめている。

新妻「っし、いくぞ……（大声で）いでよ、超強力悪魔！

長谷川の命を蘇らせたまえ〜〜〜！（大仰なポーズをとる）」

約十秒くらいの間。

新妻「……くそ！ 失敗か！」

牧田「（新妻の頭を叩いて）当たり前だろ。絶対上手くいかないと思ってたよ！」

新妻「え〜、参ったな。大分時間食っちゃったよ」

牧田「ホントだよ、もうみんな来ちまうぜ!? もう……もういいよ、とりあえず長谷川をどつかに隠そう。風呂場にも寝かせとこうぜ」

新妻「いやでも、長谷川がここにいることはみんな知ってんだろ？ じゃあ長谷川がいないと不自然じゃないか？」

牧田「だつてどうしようもないだろ!? 結局蘇る気配全然ないし。まさかこの状態のまま招き入れるわけにもいかないしさあ」

新妻「大丈夫だつて。こういう時はな、こうして……」

血が付かないように長谷川の腕を持って引き摺り、手の一人掛けソファに座らせる新妻。

新妻「これで大丈夫だろ。な？」

牧田「……なにも大丈夫じゃねえよ！ ぐっちゃぐちゃの遺体ただ座らせただけじゃねえか！ こんな絶対バシるから！」

新妻「いやいや、意外と大丈夫だと思っぜ〜。アイツら馬鹿だし」

牧田「たしかにアイツらは馬鹿だけど。でも、これはさすがに気づくだろ。だつて血まみれじゃん！」

新妻「大丈夫大丈夫。みんなを驚かせようとして、血まみれのこういう扮装をしたってことにすりゃいいんだ

よ」

牧田「でも、長谷川が一言もしゃべんなかったらさすがに不審がるだろう」

新妻「そんな時は俺が頑張るから」

牧田「どうやって?」

新妻「(裏声で) ヤア! ボク長谷川! みんなを驚かせるため、ちよつとコスプレしてみましょ。どうかな? 似合うかな?」

牧田「引くほど似てねえよ! てか似せる気ないだろう!」

新妻「まあこんなもんでも誤魔化せるだろう……」

ピンポーン(呼び鈴の音)

牧田「やべ! こんなことしてる間に来ちゃったぞ! 早く血痕隠さないと!」

新妻「急げ急げ!」

慌ただしくソファやカーベットのすらし、血痕を隠そうとする二人。

その間にもインターフォンが鳴るが完全に無視。

牧田「(カーベット等を移動し終えて) よし、これでだいたいオッケーだな」

新妻「早くいけど、もう四回くらい鳴ってる!」

急いで下手にはける二人。

その十秒後くらいに長谷川が急に立ち上がる。

止まったり突然歩き出したりと、奇妙な動きでリビングを歩き回りながら、テーブルの上にあったゴミ袋と、棚の一番上の引き出しにあった包丁の片方を回収し、上

手にはける。

その後、村岡、室井、多田、牧田、新妻の順で登場。それぞれ酒やお菓子の入ったビニール袋を持っている。

村岡「おじゃましま〜す」

室井「うわあ〜、牧田くん、いい部屋住んでるのね〜」

牧田「どうぞどうぞ。ねえ、ゆつくりくつろいで……(長谷川がいないことに気付いて) うわっ! 嘘つ、なんでなんでなんで!? (尻もちをついて大袈裟なほどに後退りして驚く)」

新妻「(牧田と同じように) エッ、ウワァー……!」

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だコエエエ……!」

牧田と新妻は二人揃ってしばらく怖がる。

その様子をポカンと見つめる三人。

多田「(二段落してから) え、なに? どうしたの?」

牧田「え……え?」

多田「いや、なんかスゲー怖がつてたけど……」

新妻「(はつと顔を上げて) あっ……アレ! ゴキブリゴキブリゴキブリ! ゴキブリいた!」

室井「え、うそっゴキブリ!」

村岡「どこどこ?」

慌てて辺りを見回す多田と村岡と室井。

牧田と新妻は「その辺いた! その辺!」と適当に指をさす。

新妻「(しばらく経ってから) あっ……ゴメン、見間違

いだったつばいわ」

室井「もお〜、脅かさないでよ〜」

牧田「悪い悪い……ハハッ、アハハハッ」

牧田と新妻はホッと胸を撫で下ろす。そして、荷物を置く三人に聞こえないようにコソコソと話す。

牧田「おい、なんで長谷川がいないんだよ! さっきたしかにソファに座らせたよなア!」

新妻「俺だつて知らねえよ! いったいどうなってるんだ!」

牧田「ま、まさかさっきのがホントに上手くいったんじゃ……」

新妻「んなわけねえだろ! あんなの上手くいくはずねえよ!」

牧田「じゃあなんでやったんだお前!」

多田「(二人が言い争っている間に) ふい〜、疲れたつと。(長谷川の座っていたソファに座る)」

牧田「あっ、そ、そこは……!」

多田「ん? なんだよ?」

新妻「いやその……そこには、あんな座らない方がいいかなあ……と……」

多田「はあ? なんてだよ? (手の平に妙な感触を覚えて確認する) ん……? なんだこれ、赤いやつが……(手の臭いを嗅ぐ) んっ、コレ……血か!」

村岡「ええっ!」

多田「なんかソファんところ血い付いてんだけど! なんだよコレエ!」

牧田「い、いやあの……えっと……」

慌て出す牧田と新妻。

牧田「思いついたように）あつ、痔！ 痔だよ痔！」

多田「は……？ 痔？」

牧田「そうそう。実はさあ、新妻のケツからなんか突然血い出ちゃってさ。それがソファに付いちゃったんだよ。な、そうだよな。」

新妻「同意するように頷いて）うん、そう。ケツから血い出ちゃったの血。アハハッ」

多田「いや、こんなに出来ないだろ普通……」

牧田「出たんだよ！ 出ちゃったもんはしょうがないだろ！」

多田「それに……なんでソファの手え置くとこに血が付いてんだよ。あと新妻の尻、別に血で汚れてないし」

牧田「だから……そう、なんかこれからパーティだつて思うと気分が乗っちゃってな。新妻がふざけてこう……」

尻丸出しでソファに肛門擦りつけてたんだよな。したら、ソファの繊維で切れちゃって血がブシャー……」

多田「（呆れ返つて）ええ……お前らマジでなにやってんだよ。え、じゃあなに？ 俺は新妻の血だらけの肛門が触れてたところ直接触ってたってこと？」

牧田「まあ……そうなるな」

多田「ふざけんよ。うわきつたねえっ！ もうベツトリ触つちまつたよもお……！ ちょっと洗面所どこ？ 洗ってくるわ」

牧田「ああ洗面所は（上手を指さして）アッチにあるから。ゴメンなホント」

多田「まあ別にいいけどよ、も……最悪だよ……」

ぶつくさと言いながら上手にはける多田。大きく息を吐いて安堵する牧田と新妻。

牧田「ヤバイぞこれ。もう結構限界きてるぞ」

新妻「でもまだどうにかなつてんじゃん。なんとか誤魔化し続けるぞ」

牧田「上手くいけばいいけど……」

村岡「（辺りを見回して）アレ？ 長谷川は？」

ギクリとする牧田と新妻。

牧田「え……長谷川……？」

村岡「うん、もう来てんでしょ？ どこにんよ。なにせ長谷川は今日のパーティの主役なんだから、アイツがいないと始まんないっしょ……」

新妻「長谷川はその……（思いついたように）あ、アレだ！ お、俺のために痔の薬買いに行ったんだよ！」

牧田「そうそう。アイツホント良い奴でさ。新妻のケツが血まみれになってんの見て、すぐに買いに行ってくれたんだよ！」

室井「へえ、優しい……」

村岡「てかお前らさあ、今日の主役を買って走りに行かせるなよなあ」

新妻「いやあ、ホントに面目ない」

村岡「え、じゃどうしよう。長谷川がいないのに乾杯すんのもなんか違うし」

室井「とりあえず、電話でどこにいるのか確認してみたら？」

村岡「そうだな。そうしよう（スマートフォンを取り出して電話をかけようとする）」

牧田「（電話をかけようとする村岡を止めて）待った待った待った待った。電話は俺がするから」

村岡「……え？」

牧田「俺が行かせたんだから、俺が責任持って電話しないと。な？ な？」

村岡「ああ……別にいいけど……」

牧田「よし、それじゃ俺が電話をかけるぞ今からあ！（スマートフォンで電話をかけるフリをする）こうやって、長谷川の電話番号を入力して……あ、もしもし、オレオレ、牧田だけさあ。なにやってんの？ もうみんなウチ着いちゃったよ……え、ええつ、なんだつてえ！（大袈裟なほど驚く）近所界限で痔の薬が全て売り切れえ!? だから隣町まで買いに向かっている、乾杯は先に始めていていい、だつてえ!? 長谷川、お前というヤツは本当に……分かった。それでは心置きなく、先に乾杯させてもらう。なんとか痔の薬を手に入れて帰還してくれ……貴君の健康を祈る！（スマートフォン

の通話を切るフリをする）……だつてさ」

村岡「お、お……なんかスッカリ状況が飲み込めたわ」

室井「それじゃあ、長谷川くんには悪いけど……先に乾杯させてもらいましようかね」

新妻「そうしようそうしよう」

それぞれが空いているソファに座り、缶ビールやサワーを手にとって開ける。

牧田「ええ、それでは。まあね、長谷川くんがちょっといい状態ではありますが、これより、長谷川くんの留学行つたらっしやいパーティを開催させていただこうと思えます。それでは、かんぱあ……い！」

一同「「かんばあ〜〜い！」」

互いに缶を鳴らしてお酒を飲み始める。

村岡「いやあ〜、いやいやいや、それにしてもあの長谷川くんがまさか留学とはねえ」

室井「ねっ、ホント意外だなあ〜。そんなにアクティブな感じしないのに」

村岡「これから寂しくなるよなあ」

室井「ホントそうねえ……新妻くんも牧田くんは特にそうなんじゃない？」

牧田・新妻「えっ？」

室井「だって三人でよくつるんでたじゃない。いつも仲良かったし、いなくなるのに寂しくないの？」

牧田「そ、そりゃあ寂しいよ〜、もう寂しくて寂しくてしょうがないよ〜なあ、新妻？」

新妻「ああうん、ホントそうだよな。まさか彼と永遠の別れになるなんて……」

室井「えっ？」

牧田「(新妻を叩いて)オイッ！ なに言ってるんだお前！」

新妻「わ、悪い、ついうっかり……」

室井「え、なに？ どうしたの？」

牧田「いや、なんでもないなんでもない。あ〜ホントにねえ、なんでもないからねえ〜(紛らわすようにお酒を飲む)」

村岡「……なんかお前ら様子がおかしいな」

牧田「声を裏返らせて(イヤ……そんなことないと思うヨ……)」

村岡は訝しげに牧田と新妻を交互に見る。

二人はゴクリと唾を飲んで震える。

少しの間。

牧田「……んん、なんか言えよ！」

村岡「(微笑みながら)ごめん、なんも思いつかなかった」

新妻「もうホント、心臓が悪い……」

室井「あ、そうだ。牧田くん、ちょっと包丁貸してくれらる？」

牧田「え……ほ、包丁？」

室井「うん、実はねえ……ほら、じゃじゃ〜ん(ビニール袋からケーキの箱を取り出して開ける) 留学祝つてこ

とでケーキ買ってきたの！ 今の内にさ、簡単に切り込みだけ入れようと思つて。ね、包丁あるでしょ？ 貸してよ」

牧田「いや………ない、よ？」

室井「は？ え、包丁なんて生活必需品じゃない。ないわけじゃないでしょ？」

牧田「あの………ちよつと、切らしてる」

室井「包丁切らすつてどういうこと!? なに、私からかわれてんの？」

牧田「いやそうじゃなくて………その………ないんだよ、包丁」

室井「え、絶対あるでしょ？ 料理の時どうしてるのよ。包丁なかったら野菜とか切れないじゃない」

牧田「て、手でやってんだ、俺」

室井「嘘吐かないでよ！ じゃあなに、あの台所にある千切りのキャベツ！ アレ、全部手でやったつて言うの!？」

牧田「そ、そうだよ！ こうキャベツを手持って、シャシャシャシャシャシャツ！ つてやったら千切りキャベツの出来上がりだよ！ もう、この神業を見せてあげたいくらいだわホントにい！」

室井「うそ〜、マジでないの包丁。じゃあどうやってケーキ分ければいいのよ」

新妻「あ〜、じゃ、しゃもじで分けようぜ？」

室井「しゃ、しゃもじ？」

新妻「しゃもじの先の方でさ、サクつてやったら分けられそうだろう？ な？ 包丁ないんだからそれで代用しようぜ」

室井「もう………まあいいわ。ケーキのことは後にしましょう」

牧田「(こそこそと新妻に話しかけて) おい………おいと………」

新妻「なんだよ」

牧田「もう色々限界だぞ。そろそろなんか手を打たないと」

新妻「手え打つたつてどうしようもないだろ。なんだよ、長谷川に似たヤツでも呼び寄せて誤魔化すのかよ。そんなの絶対無理だぞ」

牧田「わ、分かてるけどよお………もう、こんな苦しいパーティー嫌だぜ。早く解放されたい………」

新妻「しょうがないだろ。お前が殺したのがいけないんだから」

牧田「(怒りを露わにして) だからこれは俺のせいじゃないつて何度も………」



村岡「(遮るようにして)ウオエエエッ!」

牧田「エエエエエエッ!! なになにどうしたの!?!」

村岡「ヤバイ……酔ったつばい……」

牧田「え、だって……早くね!? まだ一缶も開けてないじゃん」

村岡「オレ、酒弱い、忘れてた」

室井「ちよつとお、大丈夫?」

村岡「ウウ……吐きそう……」

牧田「オイ、新妻。さっきその辺にゴミ袋置いといたよな。それ取ってやれ」

新妻「おお……(テーブルの上を探る)アレ? なくね?」

牧田「そんなわけないだろ。確かにテーブルの上乗せてただろ?」

新妻「そのはずなんだけど……おつかしいなあ」

村岡「(ふらふらと立ち上がりながら) いや、いやいや大丈夫。大丈夫だから。ちよ、ちよつとトイレ行ってくる」

室井「一人で大丈夫? 付いていこうか?」

村岡「いや、一人でいい……うぶっぐえエエ……(吐きそうになりながら、上手にはける)」

室井「大丈夫かしら、村岡くん……」

牧田「さ、さあ、どうだろうねエ……」

しばらくの間黙って酒を飲み、つまみを食す三人。  
それから意を決したように室井が話しかける。

室井「ねえ……ちよつといい?」

牧田「ん……なに?」

室井「いやさ……二人に相談したいことがあってね?」

新妻「え……なにそれ」

興味ありげに身を乗り出す牧田と新妻。

室井「(少し恥ずかしそうに) 実はね……私、長谷川くんに告白しようと思ってるの!」

牧田・新妻「(思いきり咳き込む)」

室井「ど、どうしたの? 大丈夫?」

牧田「いや、いや、大丈夫。それより……なに、え? こ、告白?」

新妻「告白するのはその……アイラブユー的なソレですか?」

室井「もちろんよ。私ね、結構前から長谷川くんのこと好きだったんだ。だからね、長谷川くんが留学に行く前にこの気持ち伝えておこうと思って……」

牧田「(狼狽しながら) ふ、ふん、なるほどねえ……それはとてもいい考えだと思うなあ……(棒読み)」

室井「(でしよう!? それでね……どうかなって)」

新妻「え?」

室井「私が告白して、長谷川くんは喜んでくれるかな……って」

顔を見合わせる牧田と新妻。

牧田「そ、そりゃあそうよ! 室井さんみたいな、ねえ、美人さんに告白されたら、そりゃ大喜びするに違いないよ! 天にも昇る心地だろうぜきつと。なあ新妻?」

新妻「お、おう。そうだな。まあ天にはもう昇ってるだらうけどな!」

牧田「(新妻を叩いて) オイツ!」

室井「え?」

牧田「いやいや、なんでもない。こっちの話、アハハハ……」

室井「え、なんかアヤシイ……」

牧田「ままままま、それでさ、なに? 長谷川のどこが好きになったの?」

室井「えええ、それは恥ずかしいよ……」

牧田「(いいじゃないいいじゃん。教えるよ……)」

室井「(照れながら) ええとねえ、やつぱ一番は人柄の良さかなあ。長谷川くんってさ、気弱で意気地なしで、いつもちよつと抜けてて、あんま男らしくないって感じ

なんだけど、その分、人の気持ちよく考えてるっていうか、気が効くっていうか……私、頻繁に長谷川くんとか飲みに行くんだけど、私が前に言ったこととか話とか全部覚えてくれて、悩みも親身に聞いてくれて、なんていうか接すれば接するほど良さが分かってくる……感じ?」

牧田「へえ、やるなあ長谷川」

新妻「いやでもなあ、アイツがすげー気が利くってのがあんま信じらんねえ……」

室井「え、そんなことないよ。ホント優しいんだから」

新妻「じゃあ例えばどんなのよ?」

室井「例えば……ほらコレ! (ワサビ味の柿ピーを手にとる)」

牧田「え……? 柿ピー?」

室井「そう、私ね、ワサビ味の柿ピーがだいっすきなんだ。柿ピーって言えばワサビ味でしょって感じなの。これ、買ってきてくれたの長谷川くんでしょ?」

牧田「うん、そ、そうだけ……」

室井「ああ、やつぱ私のこと分かってくれてるなあ。私がワサビ味の柿ピー大好きっての分かってて、わざわざ

買ってきてくれたんだ。やっぱり気が利くなあ長谷川くんは。ここに、長谷川くんの愛が、詰まってる！（ワサビ味の柿ピーの袋を抱きしめる）

呆然と顔を見合わせる牧田と新妻。

室井「ねねね、それでさそれでさ」

牧田「え、な、なに？」

室井「どんな風に告白したらいいかな？」

新妻「どんな風、というのは……」

室井「だからあ、こう色っぽく攻めるのがいいとか、それともストレートにガツンって好きですって言っちゃうのがいいのか……どういう感じに告白したら長谷川くんが付き合ってくれるかなあって」

困惑する牧田と新妻。

牧田「いや、そう言われても……」

新妻「なあ？」

室井「やっぱね、あんまりエロエロで強引にいくと引かれちゃうかなって思うの。だから、お酒入れて着実に良いムード作って、二人のドキドキが最高潮に達した時にね、こうやって、(告白実演)長谷川くん……す、好きです……付き合ってください……！ って告白したらもうズキーンってやられちゃうと思うんだけど……ねえどうかな。いいと思わない？」

牧田「ああ……うん……」

室井「だよね……そうだよね……。ああ、成功するのいいなあ……」

新妻「あの、今さらなだけさ……」

室井「ん？」

新妻「告白は、また今度にした方がいいんじゃないかな？」

室井「(困惑したように)え、なんで？ だってもう今日くらいしか告白する機会ないんだよ？」

新妻「でもなく、今日はなんか、そういう空気じゃないっていかさ……」

室井「なに、空気って？」

新妻「空気っていうかノリっていうかさあ……うん、やめよう告白は！ また今度にしましょう！」

室井「えくやだやだ。今日告白するの！ 私は今日告白したいの！ だって、今日のためにわざわざ勝負パンツ穿いてきたんだよ？」

牧田「……え、お前俺家でやるつもりだったの!？」

室井「うん、えへへ。ベッド貸して」

牧田「絶対やだよ！ お前とんでもねーこと言うな！」

新妻「とにかくだ！ とにかく今日はやめとこうぜ？」

室井「ほら、多田と村岡がなんて言うかかんねえし」

室井「(パンと手を叩いて) そうだそうだ。あの二人にも今日の告白大作戦に協力してもらわないと。多田くんとかこういうの好きそうだし、きつと手助けしてもらえよね？ うふふつ、あ、そうだそうだ。長谷川くんが帰ってくる前に、ちよっとお化粧直してこようかな。ねえ、洗面所ってアッチだよ？ (上手を指さす)」

牧田「う、うん……」

室井「ありがと。それじゃあねくオホホホ…… (気分上々のまま上手にはける)」

室井が消えるのを確認して、牧田と新妻はぐったりとソファに寄り掛かる。

新妻「はあ……つつかれるわあ……」

牧田「もう……もう嫌だ……帰りたい……」

新妻「お前ん家こころうが」

牧田「そうだったあ……うああ……うああ……」

……っ!!」

新妻「まあでもさ。なかなかいい感じに誤魔化せてんじゃねえか？ 後は室井をどうにかすれば、俺たちの勝利だ！」

牧田「なにを以って勝利とすんのか全然かんねえけどな……ま、頑張ろうぜ」

新妻「おう！」

しばらく黙って酒とツマミを口にする二人。

新妻「(ふと気付いたように) そうだ。今の内に包丁洗って綺麗にしておこうぜ。この後、ケーキの件でまたなんか言われるかもしれないだろ。今なら三人ともいないし。証拠隠滅のチャンスだ」

牧田「お、名案だな！ そうしよう！」

戸棚に近づいて一番上の棚を開ける二人。そして、包丁が一本なくなっていることに驚愕する。

牧田「アレ……ない！ 包丁が一本ないぞ！」

新妻「え、なんで……たしかに二本ともここに入れたよなあ！」

牧田「入れた入れた。絶対入れた。な、なんでないんだ……？」

二人はしばらく困惑する。

新妻「足元の血の足跡に気付いて、あつ、うわあつ！」

牧田「え、なになに、どうした!？」

新妻「これ……(血の足跡を指差す)」

牧田「あ、足跡だ……」

新妻「うわつ、ここにもある！」

牧田「続いてんじゃねえか、コレ……」

新妻「方向からして……こっちの方だな」

足跡を辿る二人。カーペットに辿り着く。

牧田「あ、よく見るとカーペットの上にも足跡が染みになってるぞ」

新妻「ホントだ……テーブルの前まで来て戻ったみたいだな……」

牧田「テーブル……?」

新妻「そういや……テーブル上のゴミ袋なくなってたよな……?」

顔を見合わせて固まる二人。

新妻「足跡は……こっちに続いてるな」

牧田「あ、ああ」

足跡は洗面所やトイレの方、つまり、上手に続いていく。二人は泣きそうな顔で上手を見つめる。

牧田「そういや、三人とも遅いな」

新妻「多田なんて、手洗つてくるだけのはずだろ?なんでこんな時間かかって……」

牧田「それに静かだ。なにも……なにも聞こえない……」

新妻「嘘だろ。ま、まさか……」

再び沈黙。

新妻「行つてくる」

牧田「え?」

新妻「俺が行つてきて、ちよつと様子見てくる」

牧田「や、やめろよ。なんかヤバいつて絶対。行かない方がいいつて」

新妻「大丈夫。少し様子見てくるだけだから。(牧田の肩を軽く叩いて)な? ちよつと待つてろ」

牧田「いや、ダメだつて。やめとけつて」

新妻「俺に任せろ。なんかあったら叫ぶから(上手にはける)」

牧田「あ、待つて待つて! 行くなよ新妻あ!」

牧田は手を伸ばして止めようとするが、新妻は行つてしまふ。

一人たたずむ牧田。

牧田「はあ……はあ……」

苦しそうに息を荒らげる牧田。

しばらくの間、不安を蹴散らすように酒を飲んだり、周囲をうろうろと歩き回る。

やがて、ソファに座つて祈るように手を組む。

再び沈黙。

牧田「なんで……なんで帰つてこないんだよ! (テーブルを激しく叩く)」

牧田は泣きそうになりながらテーブルの上の酒やツマミをぐちゃぐちゃにする(酒缶を床に投げついたり、柿皮を踏みついたり)

牧田「(上手を向いて)多田……村岡……室井……新妻あ……! (少しづつ音量を大きくする)」

数秒の間。

牧田「(咳くように)長谷川あ……」

再び俯いて沈黙する牧田。

それから意を決したように立ち上がり、戸棚の一番上から血まみれの包丁を取り出し、握りしめる。上手を見つめる。

牧田「うう……ううううっ!」

唸り声を上げながら、上手にはける牧田。

上手で軽い物音。

四十五秒ほどの長い間。

上手から長谷川登場。血塗れの包丁と、生首(マネキンで代用)の五つ入った血塗れのゴミ袋を持っている。

リビングをうろつき回ると、戸棚の一番上に包丁を仕舞う。

それからテーブルの上にゴミ袋を戻す。

三十秒ほど生首の入ったゴミ袋を見つめる。

それから動き出して下手にはける。

幕。